

地方大会から甲子園へ

秋田県高等学校野球連盟
会長 尾形徳昭

7月21日、11年ぶりに歓喜の優勝を遂げた能代松陽高校野球部の選手諸君は、8月10日、憧れの甲子園の舞台に立っていた。緊張感があったであろう。持てる力をどれだけ発揮できたかは選手諸君のみ知るところであるが、間近で応援している限りでは、能代松陽高校らしく、精一杯戦ってくれたものと思っている。惜しかったのは6回表の同点機。1死満塁の好機に斉藤君が中前適時打して2-4。秋田大会同様、後半に逆転してたたみかける戦況が想定できた。しかし、走塁のまずさもあって追加点が奪えず、残念ながら初戦敗退となってしまった。実力が違うという印象は全くなかっただけに、本当に残念である。ただ、試合後の日本高野連本部長、並びに審判委員との反省会では、参加した久米信彦理事長からうれしい報告を受けている。

「能代松陽高校の試合中における態度はとても立派である。攻守交代の全力疾走はもちろんであるが、派手なガッツポーズやハイタッチなどを慎み、相手チームに対するリスペクトの姿勢も立派である。球場入りしてからの行動も機敏であり、礼儀正しく挨拶も立派であった。非の打ち所なく、高校球児の模範となるチームだった」とのことである。

試合には負けたものの、高校野球は教育の一環であり、目指すところは、野球を通じて健全な心身を養うことである。同校はそのことを実践してくれたようで、とてもうれしく誇りに感じている。このことは、これから始まる秋季大会においても実践していただきたく、また、他校の模範となってもらいたい。加盟校の皆さんには、今一度自分たちの野球に対する姿勢を見つめ直す機会を持って欲しい。

過去に聞いた話だが、大阪桐蔭高校と沖縄の興南高校が試合をした時、スリーアウトチェンジのコールから、次のインニングのプレーボールまで、平均してほぼ1分だったそうである。かつて甲子園に出場した能代商業は1分16秒、秋田商業は1分21秒で、少々遅いと注意を受けた。まずは70秒（1分10秒）以内を目標にと伺った。加盟校にはその数値を目標に頑張ってもらいたい。

名前が出たので付け加えるが、大阪桐蔭といえば日本一の実力を持つチームという印象がある。そのことは、高校野球に関心のある人であれば誰でもが持つイメージであろう。けれども、その日本一というのは決して実力だけでなく、立ち居振る舞いから全力疾走、あらゆる面で日本一に相応しい言動ができるチームである。秋田県のチームにも、そこを目指して頑張ってもらいたいと思う。

この文章を考えたり、書いている間に、甲子園ではいろいろなドラマが起こっている。夏の大会2連覇を目指していた智弁和歌山高校が初戦で敗退した。春夏連覇を目指していた大阪桐蔭高校は9回の逆転で涙をのんだ。野球は「筋書きのないドラマ」とよく言われる。何が起こるか分からないし、何が起こっても不思議ではないのが野球であり、そこが大きな魅力なのかもしれない。

さかのぼって秋田大会を振り返ってみると、本命視されていた秋田商業が第1シードながら初戦で敗退してしまった。プレッシャーもあったであろうが、本当に残念であった。

一方、第1シード校を相手に夢中で戦った湯沢翔北高校の戦いぶりも素晴らしかった。ネット裏で観戦していたが、エース武藤君の力投が光った。球速140km/hを超えるストレートには力があり、打ち崩すのは至難の業と感じられた。さらに、守備陣も好投のエースを支え、しっかり守って、数少ないチャンスに適時打を放った……。この試合で、私が勝手に、勝敗を分けだであらうと感じた場面を紹介する。

6回裏、湯沢翔北の攻撃、無死一塁。この時、秋商は一塁走者を刺すためにピックオフプレーを企てたが、翔北側の作戦はヒットエンドラン。ウエストしたボールに打者は食らいつき、打球はセカンド方向へ。この時セカンドは一塁ベースカバーに入ったため、通常セカンドのポジションはがら空き。打球はセンターへと抜けていった。この場面だけで判断するのは極めて無理があるかもしれないが、流れが翔北側に向いていると感じた。結果はこの回に挙げた2点が決勝点となって、2-0で湯沢翔北が勝利した。

勝負なので、勝ち負けは決まるが、勝つことを目指して精一杯頑張ったのであれば、やがて、負けた悔しさを、やりきった満足感、達成感が克服してくれるであろう。大館国際情報学院高校と秋田中央高校の試合、大館国際は9回表、3点差を追いついて延長戦へ。結果は10回、秋田中央のサヨナラ勝ちだったが、大館国際の主将の小林君の翌日の新聞の記事には「負けたのは悔しいけど、3年間で一番の試合」と書かれていた。

日本学生野球憲章の前文には、以前にも話したが、『幸運にも驕らず悲運も屈せぬ明朗強靱な情意を涵養すること』が学生野球の目的の1つであると記されている。今大会を通じて、そのように成長を遂げた選手たちが、今大会は多かったような気がする。コロナ禍でいろいろな制限を加えられてきた選手たちが、久しぶりにほぼ通常通りに大会が開催されたせいもあるのかもしれない。

あれこれ書いているうちにうれしい大ニュースが起こった。仙台育英の夏の甲子園大会初優勝である。そしてこの優勝は東北勢初の快挙であり、悲願であった深紅の大優勝旗の「白河越え」を実現させたのである。第1回大会の秋田中学の準優勝以来、9度の準優勝はあったが、とうとう10度目の挑戦で夢が叶った。100回大会の金足農業の準優勝も素晴らしかったが、今回の優勝はまた違った喜びがあった。東北地区の高校球児が、「俺たちもやればできる！」と自信を深めた瞬間だったようにも思えた。夢があり、感動があり、本当に素晴らしい大会であった。決勝戦で負けた下関国際も素晴らしいチームであった。春の優勝校（大阪桐蔭）と準優勝校（近江）を破っての決勝戦進出は本当に素晴らしかった。これだけでも立派だと思う。炎天下で5試合、6試合戦うのは本当に至難の業である。厳しいが故に人間も鍛えられるが、優勝となると仙台育英のような戦略がこれからは必要になってくるのかもしれない。いずれにせよ、いろいろな意味で感動的な決勝戦であった。

秋田では、間もなく秋季東北地区高等学校野球秋田県大会が始まる。すでに目指すところは来春のセンバツである。またどんなドラマが展開されるのか楽しみである。夏の暑さを克服し、高校球児の皆さんには、これまでの努力の成果を余すところなく発揮してくれることを願っている。尚、コロナと熱中症と怪我には、十分注意してください。

2022年8月22日